
妹の日記

宝月藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹の日記

【Zコード】

N9434D

【作者名】

宝月藍

【あらすじ】

日記、妹、暗号のキーワード。それを解こうとする、主人公との仲間たちのミステリー。（どうやらかとこうと、「メティイ）

プロローグ

プロローグ

「お兄ちゃん見ないで！」

妹が俺の手から『日記帳』を取り上げる。妹のシンテールの髪が揺れる。

「あたしの日記なんだよ！」

その通りだ。でも、この『日記帳』をあげたのは俺だ。2ヶ月前に誕生日プレゼントとしてあげたものだ。書いてるかなあと思つて、見ようと思つた瞬間、妹に取り上げられた。ある意味グッドタイミング。

「『ふらばしき』の侵害だよー。」

とはいっても、とにかく中は見ていないん？プライバシーの侵害つてことは、書いているという事だろうか。いや、書いていないから見せられないということだろうか。どうなんだろう。うー解らん。

「お兄ちゃん、おやつ残しといてね。」

そう言って妹は、家を飛び出した。

ちなみに今日のおやつは、ショーキーラームだ。

アレから2・3時間後の事だ。妹は、汗をびっしゃりかいて、帰ってきた。こんな暑い日に、どこで遊んできたんだ？

「ほひいはん、ほふふふはんひょうひはほひ。」

妹がシュークリームを食べながら言つ。しかし残念な事に俺は、はひほ星人の言葉がわからない。

「食つてからしゃべつてくれ。」

俺がそう言つと、妹はがくがくとうなずいた。そして食い終わると、りんごジュースをコップに入れた。そして、風呂上りのおっさんの

“”と、一気飲みする。

「お兄ちゃん、もうすぐ誕生日だよね。」

「あ、そうだな。」

俺の誕生日は、8月21日だ。ついでに今日は、8月12日だ。
「これ、お兄ちゃんの誕生日プレゼントのかくし場所を書いた、暗
号だよ。解いて探してね。解けなかつたら、ずっともらえないよ。
あっ！もう4時だ！由衣ちゃんと遊ぶ約束してたんだつた。じゃあ
ね。いってきまーす。」

妹は家を出て行つた。

そのときの俺は、暗号とやらを解く気は一切無かつた。どうせ妹の
ことだから、誕生日が来たら、答えを教えるだろうと思つていた。
しかし答えは、一生聞けないこととなる。

妹、松原蘭11歳。8月12日4時6分に、居眠り運転の車に轢か
れ、死す。

1外周

1外周

「ねえ、君かわいいね。お兄さんたちとお茶しない？」

後ろから、声をかけられた。ふりむくと、20歳位の男の人3人が居た。

「いいです。遠慮しちゃいます。いそいでますから」

いまは、外周の最中だ。今のは、本音だ。

「いいじゃん。走ったから疲れてるでしょ」

肩をつかまれた。凄い力だ。振りほどけない。

「やめなよー。君たち。」

空気を読んでない、のんきな声がした。

「だれだよ。」

同感だ。この人たちに同感です。

「きみたちも、誘つなら相手を考えようよ。」

「は？」

「まあ、男に興味があるならべつだけど。」

「どういう意味だよ」

「や、その子男だよ。」

俺の肩をつかんでいた人の手が離れる。

女だと思つてたのか。まあ、珍しい事でもないけど。

「キシヨツ」

そういうつて男3人は去つていつた。

キシヨイのは、おまえらだろ。

あ、俺は、まつばらまこと松原誠。高一。卓球部に入つてている。見た目は10人見て、少なくとも6人は女だと思うくらい、女っぽい。その原因は、おおきく3つある。

1つ目は、身長。俺の身長は、高一の男とは思えない、145cm

だ。たまに病気じゃないかと思つくらいだ。でも、体に異常は無い。

(ちなみに、体重は、30kg)

2つ目は、声だ。中学校のときの合唱コンクールでは、男子で一人だけアルト（女声の、低いほう）に振り分けられた。いまだに、声は高いままだ。

3つ目は、髪型だ。これは何とかなりそうなもんだが、これがなかなかんだ。先輩に、髪をそれ以上切つたりしたら殺すと言われた。多分、男子卓球部と、女子卓球部が、男子第一体育館、女子第一体育館で練習しているからだと思う。それも、むさ苦しい男子体操部との練習だから余計だらう。とにかく、見た目を女っぽくしろということいらしい。いまの髪の長さは、肩につかない程度のショートだ。

「だいじょうぶかい？」

妖怪！？ と、おもつたらさつき変態を追い払つた男の人だ。

「でかいな。2mくらいに見える。（実際は、180cmぐら

いだと思う）

「ありがとうございます。大丈夫です」

俺がその場を去ろうとした時だった。

「誠、待つてよ」

「え？」

どうして名前を。

「まだ気付かないのかい？」

「何が？」

「僕の事だよ」

俺は、顔をしかめる。

「武だよ。松原武」
まつばらたけし

「もしかして、タケ兄？」

「正解」

タケ兄（以下の文は、兄ちゃん）は、俺が3歳の時に、中学から高校までエスカレート式、全寮制の学校に行って、それ以来、まともに話してないような気がする。

「とりあえず、あとでね。外周の途中だから」

「分かつた。」

俺は、兄ちゃんの返事を聞く前に、走り出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9434d/>

妹の日記

2011年1月14日04時10分発行